

イスラエル人との神の契約

「これは、モアブの地で、【主】がモーセに命じて、イスラエル人と結ばせた契約のことばである。ホレブで彼らと結ばれた契約とは別である。」(申命記 29:1)

契約の定義

契約とは二組の当事者間で結ばれる正式で拘束力のある協定または誓約である。それはある意味で約定のようなものである。けれども約定は一定の期間と条件を含む法的協定であるのに対し、契約は当事者が相互に誓約した「終生協定」である。結婚は契約の一つのかたちである。神とその民との契約の場合、神は人々の神となり、人々は自分たちを神の民として保つという誓約だった。この契約は人々に対する神の律法と約束、そして神に対する人々の忠実さと服従を土台としていた。神との「終生協定」の指針と誓約に従って生活する限り、人々は神との特別な関係を楽しみ味わい、神が計画されたいのちと目的を体験することができるのである。

シナイ山(ホレブ)での契約

神はアブラハムと契約を結ばれたけれどもその子イサク、孫のヤコブとの間でそれを更新された(→「アブラハム、イサク、ヤコブとの神の契約」の項 p.74)。イスラエル民族はこの人々の子孫である。神がシナイ山でイスラエルと結んだ契約(→出19:1注)には、アブラハム、イサク、ヤコブに与えた約束が含まれており、その協定と同じ次のような基本的原理を土台としていた。それは第一に、神だけがこの契約の約束と義務を設定するという点で、第二に、人々は従順な信仰をもってそれを受入れるということだった。この契約と先の契約が大きく違う点は、神がそれを「終生協定」として確認し設立する前に、その約束と責任の大筋を正式に示されたことである(出24:1-8)。

(1) この契約にある神の約束はアブラハムと結んだものとほとんど同じである(→出19:1注)。神はまずエジプトでの奴隷状態から救い出したあと、イスラエル人にカナンの地を与え(出6:3-6、19:4、23:20、23)、次にイスラエルの神となり、イスラエルをご自分の民とされる(出6:7、19:6、→申5:2注)と約束された。神の究極の目的は、この契約の民を通してメシヤ(「油そそがれた者」、救い主、キリスト)をこの世界に遣わすことだった。

(2) これらの約束を全部成就する前に、神はイスラエル人がシナイ山のふもとに滞在している間に与えられた律法を全力で守るように求められた。神が十戒とそのほかの多くの契約律法(→「旧約聖書の律法」の項 p.158)を啓示されたとき、イスラエル人は「主の仰せられたことは、みな行います」(出24:3)と誓った。律法の要求を受入れるというこの厳かな約束がされて、イスラエル人と神との契約は「終生協定」として確定したのである(→出24:8注)。

(3) 神の律法を守ることは常に契約の条件だった。主の命令に従い、契約で規定されたいけにえをささげるときに、イスラエル人は神の契約の民として祝福を受継けるのである(→出19:5注)。

(4) 神はまた、もし人々が契約の責任を果さない場合、何が起こるかを明瞭に教えられた。不従順に対する罰は追放(強制的に立去らせる)または死刑で、契約共同体から除外されることだった(→出31:14-15)。この罰は過越の指示に従わない人々は民の中から断たれるという出エジプト(イスラエル人の集団出国)のときに神が与えられた警告の繰返しだった(出12:15、19:12:15注)。これは単なる脅しではなかった。たとえばカデシュでイスラエル人が恐れと不信仰のために神に逆らってカナンの地に入るのを拒んだとき、神は怒って、次の39年間荒野をさまようようにされた。その期間中に20歳以上のイスラエル人(神を信頼してカナンの地を征服しようとしたカレブとヨシュアを除く)は死んでしまった(→民13:26-14:39、14:29注)。人々は不従順と不信仰によって約束の地で受けるはずの相続財産を失った(→詩95:7-11、ヘブ3:9-11、18)。

(5) 神はご自分の民から完璧さを期待しておられたのではない。神が求められたのはただ神が命じ求められたことを全部誠実に力を尽して努力し続けていくことだった。神は人間の弱さを理解し、人々が時には失敗することも認識しておられた(→申30:20注)。そこで人々の罪意識を取除き神との関係を回復するため、神はいけにえの制度を備えられた。それには罪の「おおい」と赦しを一時的でも与える年ごとの「贖罪の日」も含まれていた(→「贖罪の日」の項 p.223)。人々は罪を告白し種々のいけにえをささげて神との関係を更新することができた。けれども意図的に逆らい反抗し、信仰をもって従おうとしない人々を神は厳しく罰せられるのである。

(6) イスラエル人の契約を見て、ほかの国の人々がまことの神に従うことには祝福があることに気が付き、この信仰共同体に加わりたいと思うようになることを神は願われた(→申4:6注)。神はやがて来られる贖い主(救い主、キリスト)を通して世界の諸国民にもこれらの約束を受入れるように招かれた。その意味では、この契約は世界宣教を強調していると言うことができる。

モアブの平原で更新された契約

39年間荒野をさまよう間に、イスラエルの反抗的で不忠実な世代は死んでしまった。それから神は全く新しい世代と契約を更新して約束の地に入るように備えさせられた。カナンを征服するためには、民はこの契約に身をゆだね神がともにいてくださる確証を持つことが必要だった。

(1) 申命記の主要点はこの契約の更新である(→申緒論)。申命記は冒頭の前文のあとに(申1:1-5)、シナイ山を出発したあと神がご自分の民を取扱われた歴史を要約している(申1:6-4:43)。そして契約の主要条件を示し(申4:44-26:19)、契約の祝福とのろいをイスラエル人に示し(申27:1-30:20)、契約が継続する方法を説明して閉じている(申31:1-33:29)。この書物には特に記録されていないけれども、前の世代がシナイ山で行ったようにイスラエル民族はみな、契約の条件に対して心を合せて同意したと思われる(→出24:1-8, 申27:1)。

(2) この契約の基本的な型はシナイ山の契約と同じだった。申命記で繰返し言われている主題は、もし神の民が契約全体に従うなら神は祝福される、けれどももし従わないなら神は民をのろい罰せられるというものだった(→申27:1-30:1)。民とその子孫が約束の地であるカナンにとどまる方法はただ一つ、契約に忠実であること、つまり神を愛し(→申6:5注)、律法に従うことだった(申30:15-20)。

(3) モーセはある特定の日に契約に関する記憶を新しくするように指示した。7年ごとの仮庵の祭りのときに、イスラエル人はみな、神が選ばれた場所に集まらなければならない。そのとき、その場所で律法が全部朗読され人々はそれを守るという約束を新しくするのである(申31:9-13)。

(4) この契約を思い返し更新することについて旧約聖書はいくつかの例を記録している。イスラエルがカナンを征服したあと、ヨシュアは死ぬ前に人々をこのために招集した(ヨシ24:1)。人々の反応は「私たちは私たちの神、主に仕え、主の御声に聞き従います」という明らかで間違いのないものだった(ヨシ24:24)。その結果「ヨシュアは、その日、民と契約を結び」、神がモーセを通して与えられた律法の書にそれを記録した(ヨシ24:25-26)。同じようにエホヤダはヨアシュが即位したときに、契約更新の儀式を指導した(Ⅱ列11:17)。これはヨシヤのときも(Ⅱ列23:1-3)、ヒゼキヤのときも(⇒Ⅱ歴29:10)、エズラのときも(ネヘ8:1-10:39)行われた。

(5) 神の契約を思い返し更新することは今日もなお必要である。新約(新しい契約)は神の御子イエスキリストの犠牲によって私たちとの間に立てられた新しい「終生協定」である。主イエスは私たちの罪の刑罰を支払うためにご自分のいのちを犠牲にして、私たちが神との個人的関係を持って罪の赦しと新しいいのちを受ける道を備えてくださった。私たちは神のことはである「聖書」を読み学ぶとき、またそれが正しく教えられ宣教されるのを聞くときに、この契約をその約束と条件とともに思い出すのである。主イエスご自身もまた、主の晩餐、つまり聖餐式にあずかるときに、ご自分が私たちのために行われたことを思い出すようにと特別に命じられた(→Ⅰコリ11:17-34)。この記念の儀式によって私たちは主が払われた犠牲を思い起こす。そして心から主を愛し誠実に主に仕える献身を新しくするのである(→Ⅰコリ11:20注)。